

近代日本宗教史の中の「原理主義」—キリスト教原理主義との比較

同志社大学 小原克博

1. はじめに：なぜ、日本宗教とキリスト教（原理主義）を比較するのか

0) 前回の研究会から：Robert F. Rhodes 「仏教とアメリカ文化の対話」

真宗寺院に坐禅を取り入れるか、の問題（Buddhist Churches of America）

→ ①坐禅は「他力」に反する。②アメリカに土着化した形態を尊重すべき。

1) 近代日本は、西洋の「キリスト教的世俗国家」を意識せざるを得なかった。仏教も、近代化やナショナリズム、近代的な〈個〉の確立への対応の中で、キリスト教を意識した。

2) 近代国家の形成途上において見られる、世俗主義（世俗的ナショナリズム）と原理主義（宗教的ナショナリズム）の緊張関係を視野に入れることによって、日本近代史の「一般性」と「特殊性」をより客観的に考察することが可能となる。

cf. イアン・ブルマ『近代日本の誕生』（ランダムハウス講談社、2006年）、アンドルー・ゴードン『日本の200年』（みすず書房、2006年）：いずれも日本近代史を特殊なものとする見方に対する批判を含んでいる。

3) 「一神教と多神教」をめぐる議論の中で、一神教は原理主義的な宗教とされ、多神教（仏教を含む）はそうでないものとして一括りにされがちである。「一神教」だけでなく、「多神教」とされているものの内実・内部構造が問われなければならない。

4) 日本宗教（特に仏教）からの一神教批判の質を高める必要がある。「一神教」を対象とし、ユダヤ教・キリスト教・イスラームを個別に批判することを避けようとしている傾向があるが、なぜか。

2. 「原理主義」の用語法

1) 「原理主義」（fundamentalism）の定義をめぐる議論

異なる宗教伝統から派生した（政治的な）宗教復興勢力に対し、「原理主義」を当てはめることに対しては賛否両論がある。

2) 狭義の意味と広義の意味の使い分け (区別)

- ・狭義の意味：アメリカ・キリスト教史に即した理解。
- ・広義の意味「近代化・世俗化に抵抗しつつ、それを超える文明論的な原理を掲げる、思想的・政治的な運動」（『原理主義から世界の動きが見える』 p.32、以下同様）。
 - 通文化的な問題分析のために有用 (p.35)。
 - 認識の「ズレ」の発見こそが有用な情報となる (p.102)。

3) 日本宗教史への適用

- ・三つの一神教の相違点や特質を析出させるための概念装置としての「原理主義」
 - ↓
 - ・キリスト教と日本宗教、西欧の近代化と日本の近代化の相違点や特質を析出させる概念装置としての「原理主義」
- ただし、「近代西洋」は決して一枚岩ではなかったことに注意を払う必要がある。

3. キリスト教原理主義の特質とその変容——仏教との比較を交えて

1) 1910~20年代の原理主義 ☞【資料1】

近代的・世俗的時代精神との葛藤が背景にある。

- ①聖書批評学：近代的理性に基づき、聖書の直解主義的解釈を批判
- cf. 近代的理性と対峙する中での伝統教学批判。例：野々村直太朗（浄土真宗本願寺派）
- ②進化論
- cf. 日本の宗教学の初期における進化論（宗教進化論）の影響。島地黙雷による神道批判。内村鑑三も進化論に傾倒。
- cf. 現代アメリカにおける進化論論争（インテリジェント・デザイン論 p.119ff.）。
- ex. God vs. Science: Can religion and technological progress coexist? A spirited debate between biologist Richard Dawkins and evangelical scientist Francis Collins, in: *TIME*, January 15, 2007.

(保守派の反応)

- ①ディスペンセーションリズム
- 創造から終末までの歴史区分を叙述。千年王国運動を源流とする。歴史の完成。
- cf. 田中智学による未来年表（『宗門之維新』[1901年]巻末で、日蓮主義により日本が統合されるまでの50年間に10期に分けて詳述している）。
- ②プリンストン神学：聖書への集中（聖書の無謬性）
- 社会・政治への関心が減退していく。信仰は心の問題。

- cf. 島地黙雷による教部省（国家による宗教統合政策）批判（後述）。
- cf. 近代主義に対するカトリックの対応：第一バチカン公会議（1869-1870）において確認された教皇の無謬性の教理。（カトリック）教皇の無謬性 //（プロテスタント）聖書の無謬性

（リベラル派の反応）

- ・愛の実践（チャールズ・エリオット）（p.124）

道徳的实践こそがイエスに従う道であり、教会・聖書・礼拝等は二次的なものに過ぎない。

- cf. ドイツの文化プロテスタンティズム：教義より道徳的实践が優先される。

- cf. 井上哲次郎

宗教を道徳（倫理）によって置き換えようとする道徳主義。国民道徳としての「教育勅語」（1890年）を哲学的に正当化した。

内村鑑三の不敬事件（1891年）→井上によって先導されたキリスト教批判、「教育と宗教の衝突」論争

『宗教と倫理の関係』（1902年）「今後は世界及び人生観を基礎とせる倫理（即ち宗教的倫理）さへあれば足れり、是れ即ち将来人類の宗教たるべきものにして、一切過去の宗教の如き、最早其必要あるを見ざるなり、」（90-91頁）

2）1980年代以降の原理主義（p.145ff.）

- ・政治への積極的関与

信仰を心の問題だけにとどめておくことはできない。

- cf. 新仏教運動、尊皇奉仏大同団、田中智学による日蓮主義運動（いずれもナショナリズムと結合）、新興仏教青年同盟（資本主義・軍国主義批判。反ユダヤ主義批判も）

4. 近代化の中の神道

神道の一神教化、神社非宗教論

- cf. 前提としての本居宣長

『古事記』の再発見（「漢意」^{カラゴコロ}を排し「神代」を回復することを目的とする）

本居宣長による神の定義（神道に大きな影響を与えている）

「凡て迦微^{カミ}とは、①古御典^{イニシエノフミドモ}等に見えたる天地の諸^{モロモロ}の神たちを始めて、②其を祀れる社に坐御霊^{ミタマ}をも申し、③又人はさらにも云ず、④鳥獸木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常^{ヨノツネ}ならずすぐれたる徳^{コト}のありて、可畏^{カシコ}き物を迦微とは云なり、」（『古事記伝』三ノ巻）→ ①神典の神々、②神社の神々、③人間の神々、④自然の神々

5. 近代化の中の仏教

1) 島地黙雷 (1838-1911) 浄土真宗本願寺派

- ・政教分離、信教の自由（「三条教則批判建白書」）

※三条教則（教部省による）：①敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事、②天理人道ヲ明ニスベキ事、③皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スベキ事

- ・宗教は心の問題。政治より上位のものとして分離

信教の自由を説き、神道批判をするものの、結果的には政府の基本姿勢を容認することになってしまう。

- ・キリスト教を共通の敵とし、それに対する防波堤として仏教の役割を強調した。

（日本仏教）キリスト教 // （キリスト教原理主義）聖書批評学・進化論、リベラリズム

2) 清沢満之 (1863-1903) 浄土真宗大谷派

- ・精神主義

「精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり、故に外物を追ひ他人に従ひて、為に煩悶憂苦することないし」（『清沢満之全集』第六卷、3頁。以下の引用も同書より）。

「精神主義」≡「主観主義」「内観主義」

阿弥陀仏→「絶対無限者」

cf. カール・バルト：「絶対他者」としての神。『ローマ書』（1919年、宗教改革の原理の再発見）

- ・『歎異抄』の再発見

蓮如によって禁書とされて以来、『歎異抄』は決してポピュラーな文献ではなかった。

- ・宗教と道德

「宗教と道德の区別が明かでありて宗教者は宗教の分を守り、道德家は道德の分を守りて各其能を尽せば各其功績を国家社会に貢献することである」（158頁）。

世俗道德から「他力」の宗教へ

cf. 井上哲次郎の道德主義（宗教の道德への還元）

- ・進歩史観の相対化

「精神主義は、彼の客観的事業の進歩、特に物質的文明の進歩に対しては、敢て妨害せんとするものにあらざると同時に、敢て貢献せんとするものにあらざるなり」（44頁）。

- ・ナショナリズムの相対化

「故に真面目に宗教的天地に入らうと思ふ人ならば、釈尊がその伝記もて教へ給ひし如く、親も捨てねばなりませぬ、妻子も捨てねばなりませぬ、財産も捨てねばなりませぬ、国家も捨てねばなりませぬ、進んでは自分其者も捨てねばなりませぬ。語を換えて云へば、宗教的天地に入らうと思ふ人は、形而下の孝行心も、愛国心も捨てねばならぬ」（77頁）。

非戦論に近い立場であるが、清沢の弟子の中には、暁烏敏のように積極的な戦争協力へと踏み込んでいった者も少なくはなかった。

3) 田中智学 (1861-1939) 日蓮宗

日蓮主義運動：第二次世界大戦前の日本において、「法華教」にもとづく仏教的な政教一致による日本統合と世界統一の実現による理想世界（仏国土）の達成を目指して、社会的・政治的な志向性をもって展開された仏教系宗教運動。

田中は、日蓮の「立正安国」「法界冥合」「王仏冥合」などの教えを近代日本の政教関係に即して＜再解釈＞した。最終的に、仏教的な政教一致による聖なる国民共同体の形成を目標とした。

4) 久松真一 (1889-1980) 禅

近代的な危機意識の中で、伝統禅の立場を離れながら、体系化された複雑な禅公案を放棄し、「基本的公案」を作った。

F.A.S.の提唱

F=形なき自己 (Formless self)、A=全人類 (All mankind)、S=歴史を超えた歴史 (Suprahistorical history) (『久松真一著作集』第三巻、458-459頁)

※ (久松真一) F.A.S. // (キリスト教原理主義) *The Fundamentals: A Testimony to the Truth* (1910-1915) ただし、前者が普遍性 (包括性) を目指したのに対し、後者は排他的性格を持つ。

6. まとめ

1) 近代日本宗教史は、キリスト教原理主義の歴史的経緯との間に並行関係を有しており、部分的にはそれを先取りしている。

【類似点】

① 仏教もキリスト教原理主義も、社会 (国家) の近代化のプロセスの中で、いったん否定されている。それが再生 (新たな理念化、原理の模索) の起点になっている。

cf. 神仏分離・廃仏毀釈、西洋の仏教学における東アジア (日本) 仏教の軽視

② 近代主義 (近代的理性、進化論、道徳主義等) への対応の中で、自己規定・自己形成をなしていった。

③ テキストの再発見。聖典の「再聖典化」 (recanonicalizing) 。

cf. ガンディー：「バガヴァッド・ギーター」などのヒンドゥー聖典の価値を英国留学中に再発見する。⇒「非暴力」抵抗運動 (帝国主義に対する抵抗原理) (p.37f.)

【相違点】

西洋において長い年月のかかった近代化のプロセスを、日本では短期間の内に実現しようとした。⇒前近代・近代・ポスト近代の混在

2) 近代日本における原理の模索と挫折

個（近代的自我）の確立が常に、「個を超えるもの」とセットにして考えられた。

- ・近代＝個の確立⇒西欧
- ・ポスト近代（＝前近代 [ex. 武士道]）＝個を超えるもの⇒日本（アジア主義）

個を超えるもの（内在的・外在的）をいかに原理化するか、という課題に日本の伝統宗教は関わることになった。

外在的には、疑似家族的共同体への一体感へと溶融していく（外部への超越）。

内在的には、（広い意味での）精神主義へと沈潜していく（内部への超越）。

3) 他者性の認識

外部への超越も、内部への超越も、他者認識を欠いていたのではないか。

日本の仏教者（仏教研究者）は、日本仏教の優越性（特殊性）を主張した。そのことが、他のアジア諸国の仏教徒を「他者」として認識することを困難にしたのではないか。

cf. ディートリヒ・ボンヘッファー「自然的なもの」 ⇨【資料2】

「恵みのみ」という宗教改革の原理（の形骸化）が「人間的・自然的なものの内部における相対的な違い」を見えなくさせてしまった。

cf. （キリスト教）原理主義の問題

多様性の否定：異なる価値観を持つ「他者」への敵意

〈参考文献〉

※基本的な文献のみ

小原克博・中田考・手島勲矢『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』PHP 研究所、2006年。

マリーズ・リズン『ファンダメンタリズム』（中村圭志 訳、島藺進 解説）岩波書店、2006年。

Andrew Greeley and Michael Hout, *The Truth about Conservative Christians: What They Think and What They Believe*, Chicago/ London: The University of Chicago Press, 2006.

安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波書店、1979年。

東より子『宣長神学の構造——仮構された「神代」』ペリかん社、1999年。

末木文美士『近代日本と仏教』トランスビュー、2004年。

今村仁司『清沢満之の思想』人文書院、2003年。

大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、2001年。

ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』（エイミー・ルイズ・ツジモト訳）光人社、2001年。

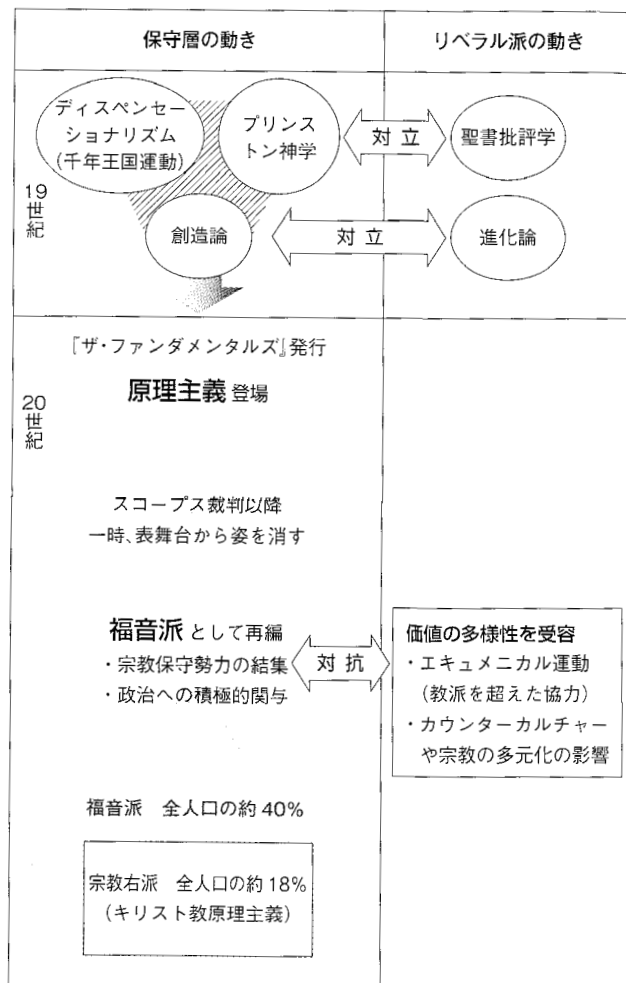
(関連論文)

小原克博「現代神学における宗教的多元性——グローバル化する世俗化社会の行方」、『宗教研究』329号、2001年、221-245頁。

小原克博「一神教と多神教をめぐるディスコースとリアルポリテイク」、『宗教研究』第345号、2005年、221-244頁。

小原克博「「宗教と科学」に見る近代化の諸相——進化論を中心にして」、金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・いのち——新しい対話の道を求めて』新教出版社、2006年、124-147頁。

【資料1】（『原理主義から世界の動きが見える』p.151）



【資料2】 ディートリヒ・ボンヘッファー「自然的なもの」

「『自然的なもの』（das Natürliche）というこの概念は、福音主義的倫理においては、不信の目をもって見られて来た。……福音にとっての自然的なものの意味は不明確となり、福音主義教会は、自然的生活の緊急問題に対する、明確な・指示的な言葉を失ってしまった。そこで福音主義教会は、数多くの人たちの人生の重要な決定に対して、なんらの答えや助けをも与えることができなくなり、次第に神の恵みの（正統的に静的な）防衛という態度をとることになった。なぜなら、恵みの光の前で、すべての人間的・自然的なものは、罪という夜陰の中に没してしまうので、人はもはや、人間的・自然的なものの内部における相対的な違いにあえて注目しようとはしなくなる。そのようなことに注目すると、恵みが恵みとしての力を失ってしまうのではないかということを、彼は恐れるからである。…自然のものは、その唯一の反対命題として、神の言葉を持っているのであって、自然的なものは、もはや不自然なものに対する概念ではなくなった。自然的なものも不自然なものも、同じように神の言葉の前には非難さるべきものとなった。このことは、自然的生活の領域における完全な崩壊を意味した。従って、自然的なものという概念は、福音に基づいて、再び回復されなければならない」（『現代キリスト教倫理』135-136頁）。